



RSウイルスとは？

毎年冬になると流行するかぜなどの感染症。その原因となるウイルスは数百種にも及ぶと言われています。

中でも乳幼児がもっともかかりやすいのがRSウイルス(Respiratory Syncytial Virus)です。感染力は非常に強く、ほとんどの子供が2歳までに感染するといわれ、一度かかっても十分に免疫がつかないため何度もかかりますが、繰り返し感染しながら、徐々に免疫がつき症状は軽くなります。大人でも感染します。

主な症状としては38℃以上の熱・鼻水・せき・咽頭痛などです。生後6ヶ月未満の、；。乳児や低体重児などは重症化しやすく、気管支炎やまれに肺炎をおこすため注意が必要です。一般的には、年長児以降は重症化することは少ないです。

例年、RSウイルスは秋から春まで流行すると言われていましたが、2012年は夏から流行が始まっています。年間を通し、注意が必要です。



どこから感染するの？

RSウイルスは、目・鼻・口の粘膜から感染します。ウイルスを含むしぶき(飛まつ)が患者のくしゃみや咳で空気中に放出され、それを吸い込む、あるいは手指を介して接触することにより感染します。ウイルスがおもちゃなどに付着してから4~7時間は感染力を持っているといいます。また、潜伏期間は2~7日(通常4~5日)とされています。熱などの症状が消失しても、ウイルスが排出される期間(発症から1週間程度)は、咳などにより感染を広げるため注意が必要です。



受診のタイミングは？

小さなお子さんにかぜのような症状が見られ、熱が38度以上に上がり、呼吸が浅く速くなる、ゼイゼイと咳がひどく眠れない、痰が詰まる、顔色が悪い、急にぐったりするなどの様子が見られたときは、夜中でも小児科医のいる病院へ受診しましょう。特に、生後6か月未満のお子さんは注意してください。

熱が38度以上でも、水分が摂れていて、普段よりは元気がない、程度であればおうちで様子を見ても大丈夫です。

以下の症状が出たらすぐ病院へ！

□急激にぐったりする □ゼイゼイと音がして咳が続き眠れない □顔色が悪い

□呼吸が浅く、呼吸数が1分間に60回以上になる □痰が詰まる

心配なとき、また夜間・休日などに受診される際は、必ず病院に電話してください。



治療方法は？

治療は、特効薬はなく、対症療法(高熱なら解熱剤、咳なら咳止めの薬、など)が行われます。先天性心疾患や慢性肺疾患など基礎疾患のあるお子さんの場合などは、重症化のリスクを考慮し主治医の判断で予防的な投薬を行う場合があります。日ごろからかかりつけ医とよく相談し、助言を受けるようにしてください。



RSウイルスを予防しよう

飛まつ感染や接触感染であることを考慮して感染を広げないことが大切です。

普段から外出の後や調理・食事の前、鼻をかんだ後などは石鹸でよく手を洗いましょう。小さな赤ちゃんのいるご家庭では、おうちの中でもパパ・ママが咳をしているときはマスクをつけるなど心がけましょう。またRSウイルスの流行があるときは赤ちゃんをなるべく人ごみに連れて行かないようにしましょう。

板橋区ではRSウイルスも、幼稚園・保育園などの登園許可証(医師の許可)の対象となりました。熱などの症状が消失しても、咳症状が見られる場合などは、感染防止の観点とともに、お子さんの体調に配慮し、登園を見合わせることも検討してください。



©fumira